



2014年11/12月号  
 新版 第70号  
 編集  
 駿台甲府高等学校  
 駿台甲府中学校  
 駿台甲府小学校

偶然の出会いが減っていく

高校校長 酒井 徹哉

ある光景

スーパーなどで、幼い子が「これ買って、あれ買ってー」と駄々を捏ねる、動こうとしない、時に泣きわめく。誰もこんな光景を見たことがあると思う。親にしてみれば迷惑千万だが、本人にとつては必死。自分で買うことのできない子供は、この方法しかない。こういう行動はある意味、子供の特権と言っても良い。そのうち、どうすれば親を説得できるか、知恵が働くようになる。そう、社会性が身に付いてくるのである。当事者の親には申し訳ないが、親にとつても、どう対応するかを試練である。少し前、似ていて非なる光景を見た。野菜売り場で、母親が何かを籠に入れる。すると幼稚園児くらいの女の子が、大声で「××入れないで!」、「××買ったちゃだめー!」と絶叫している。たぶん嫌いな野菜なのであろう。ついには、強引にその野菜を籠から出そうとしている。一見、先ほどの逆バージョンに見えるが、よく考えると全く違う次元の行動である。

自分とつて不都合なもの、嫌いなものを排除しようという習慣を小さいうちから身に付けてしまうことは、子供の発達においてマイナスが大きすぎる。ましてや親がそれを是とするのは、火に油を注ぐようなものである。

**B面との出会い**

音楽を聞く手段として、レコードはすでに産業遺跡と化した。カセットテープも、ほぼ絶滅危惧種である。CDも若い世代はあまり買わなくなり、音楽配信によって楽曲を入手するのが主流になっている。

二〇〇七年、テノール歌手の秋川雅史が歌う「千の風になつて」がオリコンチャート\*でミリオンセラーを達成した。この手の歌が大ヒット?と思つたが、その理由は、主たる購買層が、CDでしか楽曲を入手できない中高年中心だったからである。CDの売り上げランキングが、実際の人気を反映していないと言われて久しい。

携帯電話しか所持しない層が増えている今日、電話による世論調査は、固定電話のみを対象としていることから、偏りが大きいというの、同様の現象である。

レコードやCDの衰退に伴つて、必然的に消えていくものがある。それはB面、あるいはカップリング曲である。B面曲は、悪く言えば、抱き合わせ販売のようなもの。消費者からすれば、聞きたくない曲まで

買わなければならないのである。ところが、このB面曲の方が大ヒットした事例がいくつもある。

松田聖子の名曲、「Sweet Memories」は、「ガラスの林檎」のB面。泣ける歌として常に名前の挙がるプリンセスプリンスの「M」は「Diamonds」のB面である。比較的新しいところでは、S.M.A.Pの「オレンジ」は「ライオンはーと」のカップリング曲である。

初めからB面曲を目当てに買う人は、非常に少ないと思う。ここに掲げた3曲のうち、「Sweet Memories」はペンギンのアニメが登場するサントリーのCMで有名になった。この曲は別として、他の2曲は、A面のお蔭で多くの人々と出会うことになり、掘り出し物の名曲となったのである。

音楽配信によつて、好きな曲しか入手しないというシステムが定着しつつある現代、B面曲との偶然の出会いは無くなつていくのかと思うとやや寂しい。

幕の内弁当はやはり必要

子供の頃、寿司というのは、よほどの祝事でない限り口にできなかった。それも、握り寿司を出前で取るのが普通で、その中には、好みでないネタも入っている。海老などは3つ4つ入つていればいいのに、と思つたものである。

いまや回転寿司店が市中にあふれ、安価ゆえに、家族で気軽に楽しめる。そして、好きなネタがいくつでも食べられる。しかし、子供たちは好きなネタしか食べないだろう。苦手なネタを食べる必要はない。敢えて見知らぬネタに挑戦しないだろう。

夕食で何を食べたいか、毎日のように子供に聞く親が多いと聞く。その方が、子供が喜んで食べてくれるかもしれないが、子供の料理の選択肢は極めて少ない。食卓には毎日のように子供メニューが並ぶ。味付けは濃い目で単調、素材の味をあまり感じさせない料理になる。

お昼のお弁当も同様である。子供の好きな食材中心になる。最近では、嫌いなものを入れると怒り出す子供が多いようだ。親は子供に不満を言われたくないので、子供に迎合する。

栄養のバランスや、好き嫌いをなくすために様々なメニューを考え、子供たちに食べさせるのが親の役目と思う。しかし、それが崩壊しつつある。このままで行くと、初老の域に達しても、「好きな食べ物はハンバーグとカレーとスパゲッティ」と平気で答えるオジさんやオバさんたちが溢れるのではないかと思うと、恐ろしい。

そういうご時世の中で、駿台甲府中学校で給食を始めたことは、とても良いことだと思う。栄養面もあるが、苦手な食材、知らない料理に出あうという経験が大切なのである。そうでなければ、嫌いなものでも食べるという試練を経験しないし、未知のおいしい食べ物に出会うという喜びも知らない大人になつてしまう。

修学旅行など学校外での行事には、弁当がつきものである。いわゆる幕の内弁当を提供する。生徒には、あまり評判がよくない。たとえば焼肉弁当を出せば多くの生徒は喜ぶかもしれないが、肉が苦手な、あるいは事情で食べられない生徒には、苦痛となる。そういう理由もあるが、数多くの食材を食べてもらいたいという点でやはり幕の内弁当なのである。

社会のシステムが、偶然の出会いを少なくする方向に働いていることは確実である。そんな中で、教育現場は、極力偶然の出会いが起こるような場面を作つてやる使命があると最近感じている。

\*オリコンチャート\*が発表する音楽ソフトの売り上げランキング

## 高校より

変わりゆく大学入試

進路指導部主任 小笠原 理

来年度から東京大学は後期試験に替えて推薦入試を導入し、京都大学は、特色入試(学力型AOや推薦)を導入するそうです。現在は、AOや公募推薦をはじめ、センター利用入試があったり、全学部入試があったり、入試方式は実に多様で且つ、毎年変更されています。以前の進学指導の経験は役に立たず、パソコンに志望学部や入試科目の検索条件を入力し、検索をかけながら進学指導をする時代になっています。

私立大学では今や半数以上がAOか推薦で入学する時代となり、私大志望者にとつて、受験は高3秋から始まるようになりました。国立大学ではAOや公募推薦が増えているもののまだ、8割以上が一般入試で入学しています。ただし、後期日程を廃止する大学は増えており、前期日程で勝負するのが近年の鉄則になっています。

それに加えて、すでに新聞等のメディアで発表されている通り、早ければ5年後には、センター試験がなくなり、「達成度テスト」が導入される可能性があります。案によると、「基礎」と「発展」の二種類の試験があるらしい。高2生から受験でき、複数回受験できるらしい。1点刻みの点数制ではなく、幅を持たせたランク制になるらしい。まだまだ、具体案については流動的なのですが、今後大学入試制度が大きく変わっていくことだけは確かなようです。センター試験がなくなった将来、大学入試はどうなっているのでしょうか?目指して

いるのは「受験生の能力・意欲・適性を多面的に総合的に評価して選抜する」入試だそうです。そうすると、「到達度テスト」で基礎学力を確認し、「面接」や「小論文」や「独自の学力試験」を組み合わせた形、現在の入試制度で言えばAOや公募推薦に近い形の試験が増えてくるのが予想されます。「集団討論」や「プレゼンテーション」も多くなるかもしれません。

仕事柄、秋には、高校3年生の小論文指導や面接練習を行うことが多いのですが、実は、小論文を書かせれば、その人がどのくらい漢字を知っているか、どのくらい語彙力があるかがわかります。その上で、どのくらい自分の意見を持っているか、言い換えれば、日ごろ物事をどのくらい深く考えているかがわかります。面接の練習の中で、時事問題を尋ねれば、日ごろニュースを見たり、読んだりしているかがわかるし、教科に関する質問を少しすれば、その教科の基本的な学力がわかります。集団討論の練習をさせてみると、自分の意見の発信力に加えて、他人の意見を聴く力もわかります。

今後求められる人は、どうやら勉強だけやってきた人ではなさそうです。そうかといつて、例えば、スポーツばかりやってきた人が求めているわけでもありません。勉強もして、部活動もして、地域のボランティア活動もして、充実した学生生活を送ってきた人が結局一番有利なようです。学習とスポーツ等の割合は人それぞれですが、自分なりに頑張ってきた人、つまり、駿台甲府でいうところの「文武共存」をしてきた人が求められているということです。

大学入試の制度変更になり振り回されるのはやめましょう。駿台甲府の教育を信じて「文武共存」の学生生活を送りましょう。そう

すれば入試制度がどう変わろうとも対応することが可能です。

がんばれ、33期生

3学年主任 後藤 和利

いよいよ最終局面を迎えました。センター試験までおよそ50日、その後、前期日程まで40日、さらに後期日程まで10日です。夏期講習の頃から徐々に上げていったギアはセンターマラソン、特別学習会、毎週のように行われた模試とで今ではトップギアに入っています。みなさんは早朝から夜になるまで学校でよく学習を続けています。課外や添削もよく頑張っています。

学習が成果として見えるようになるまで半年と言われます。我々は「みなさんの学習に向き合う日常は合格点」という印象を持つていますから、そろそろ結果が目に見えてくる頃です。この調子であと百日を力まずに送りましょう。焦ることはありません。今までの「いつも」をあと百回繰り返すだけなのだと考えましょう。

余裕を持つて朝を始めましょう。よく学んで、よく理解しましょう。受験を直前にしても大切なことは自分で考えて正解に辿りつけること。今までと何も変わりません。明晰な頭脳で物事を理解し、応用する。この能力は受験を突破するだけでなく、その後の学問、研究に大きく役立つことでしょう。

さあ、これから最高の準備をしましょう。毎日毎日私たちの人生にはアンコールはありません。毎日を満足して終えましょう。そして新しい日を迎えましょう。あと少しです。

日々、いつものように!

美術デザイン科展のお知らせ

学科長 岡田 昭夫

11月は私のプライド展、高校芸術文化祭、高美連展と展覧会が目白押しで、美術デザイン科は活発な日々を過ごしています。11月初めには、授業でも美術デザイン科展コーナーに出品するための作品制作に入りました。様々な行事も重なって、若干浮き足立ってしまったところも見受けられますが、生徒たちは頑張っています。

今年の美術デザイン科展は、12月20日から26日の6日間になりました。(22日は休館日)祭日等を含んではいるものの、年内のみの開催となつて、若干集客に不安を抱いています。ポスター・チラシ等を作成し、各校舍事務室にお願いしてありますので、掲示等のご協力をお願いします。

この展覧会は、美術デザイン科の生徒たちの活動の様子を見ていただくため、1月から12月の間に制作した授業作品、課外作品、コンクールへの出品作等から選抜し展示します。それに加え、来場者に投票していただき賞を決める美デ科展コンクールとして、全生徒の自由制作を展示しています。つたない作品ではありますが、お知り合いもお誘い下さつて1年間の成果を是非ご覧ください。

会場にはクリスマスツリーを用意し、オーナメントとして生徒作品等のクリスマスカードや缶バッチ、ラミカ、お子様用にお菓子等のお土産も用意しお待ちしております。



## 中学より

### 今の自分と理想の自分

3年副担任 出澤 郁美

中学校では、三年間に必ず一人一回、モラルをテーマに弁論を発表する機会があります。そこでよく発表されるのは、公共機関を使う際のマナーや、自転車に乗る上でのマナー、いじめ問題についてです。弁論の着地点は、「人に迷惑をかけたり、人を傷つけるような行為はやめよう」ということです。つまり、マナーとはその社会にいる人々が気持ちよく生活できるための態度なのだと思います。

人は一人では生きていけません。何らかの集団の中で、誰かに支えてもらい、誰かを支えながら生きていくものです。であるなら、お互いが居心地の良い空間が良いでしょう。そのためにも、その場に見合ったマナーが必要なのだと思います。しかし、片方に基準を合わせれば、もう片方に少なからず我慢をさせることになりそうです。だから、お互いが七〇%満足ぐらいが、丁度いいということになるのではないかと。ということクラスを生徒に伝えたことがあります。みんなが居心地がいい空間というのは、みんながちよつとずつ我慢をする空間なのだ。

しかし頭ではわかっていながらも、三〇%ですら我慢はしたくないと、つい利己的な考え方が頭を擡げます。そして、自分の行動は人に迷惑をかけていないと都合よく自分に言い訳をします。「言い訳は進歩の敵」(野村克也)。そして「俺の敵はだいたい俺」(宇宙兄弟)小田宙哉)ですね。内容を、モラル弁論に戻します。モラル弁論では、マナー違反をした人たちを見か

けた、心無い言葉を浴びせられたという、第三者、または被害者の立場で書かれることが多いです。でも私は、モラル弁論の講評をする際、自分の経験に基づいていること、そして、自分に非がある経験を通じている内容の方が人の心を打つのだと言っています。なぜなら、正論は聞き飽きているからです。何が正しいかなんてわかっているからです。そして、インターネットで検索した文面から得た情報より、他人の失敗談から分析するより、自分自身の失敗から学ぶことの方が多くからです。

できれば他人に自分の恥はさらしたくはありませんが、モラル弁論発表の場は自分の行いを振り返り、言い訳している弱い自分気づくことのできるとても良い機会だと思います。ですから、出来るだけ自分の突かれたら痛い部分と向き合って、その傷に絆創膏を貼るのではなく、完全治癒を目指して欲しいです。

さて、最後に私が出会った生徒の話をして終わりたいと思います。私の教え子は掃除を真面目にせず、私から注意を受け、その場ははぐらかしました。しかし家に帰り、もやもやとした気持ちをお家の人に話し、自分の気持ちを整理して、次の日私に謝りに来ました。自分の行いに言い訳をしませんでした。何か嫌ったままその一件を持ち帰り、自分の気持ちに向き合ってくれました。そのことがとても嬉しく今でも私の心に残っています。そんなこと?と思われるかも知れませんが、人は簡単なことほど実は出来ないものです。それは大人も子供も同じです。寧ろ大人の方がたちが悪いのかも知れません。枯券に関わるからです。無駄な枯券は捨てて、シンプルな大人になりたいものです。

## 模擬試験を受ける意義

1年A組担任 羽澤 健

模擬試験の監督している時間が好きである。各生徒が初めて見る問題に対し、普段の授業に増して集中力を高め、緊張感を持ちながら試験に臨んでいる。そのような生徒たちの姿に胸を打たれるのである。そして、この「集中力」「緊張感」の中で考え、導き出す解答だからこそ、生徒たちにとって真の知識・知恵になるのだと思う。模擬試験を受ける意義を次の六点に分けて述べてみたい。

1、試験の形式・試験の雰囲気慣れる。  
生徒たちにとって大切なことは「本番の試験」で実力を発揮することだ。そして、その本番は一度しかない。そのため、本番の試験をまねて作った模擬試験で経験を積むことが必要だと思う。また、本番の試験は全国の受験者と一緒に試験に臨む。そこでは隣の席が知らない人である可能性は極めて高い。そのような状況でも自分の実力が出せるようにするために、定期試験とは違った雰囲気での模擬試験が必要だと思ふ。

2、今まで学習してきたことができるかを確認する。

模擬試験を受けると、解答する場面で「確か、こんな感じだった気がする」ということが多々ある。「確か……」な感じ」ということは、身に付いている知識が不確かな証拠である。模擬試験を受けることで、今まで勉強し、習得してきた知識が正確に身に付いているかの確認ができると思う。また、「不確かな知識が多い」と感じた生徒は、今までの勉強法を見直す良い機会にもなる。3、自分の弱点を知る。

模擬試験の結果が返却されると、得点や

順位、偏差値に一喜一憂して終わってしまった生徒がいる。これほどもったいないことは無いと感じる。重要なのは、どこができなかったのかを知ることにあると思う。しかも模擬試験ならば細かい分野まで自分の弱点を知ることができる。自分の弱点が分かれば、その後の学習方針も立てられるはずだ。

4、模擬試験をテキストにして復習する。  
先述したことだが、模擬試験を受けている時は、集中力や緊張感がいつも増して高まっている。つまり、大きなエネルギーを使って受験しているということだ。それだけ費やしたエネルギーの分、解けた問題や、解けなかった問題は強く印象に残る。この印象が鮮明なうちに復習をして、知識を確実にすることが重要だと思う。加えて、模擬試験の解答解説はとてもよくできていて、この解答解説を有効に使って復習をする。この学習効果が目込まれるはずだ。

5、本番の試験へのベンチマークにする。  
本校の生徒たちにとって本番の試験とは「大学受験」になると思うが、そこまでは時間がある。しかし、模擬試験は年に数回行われるため目標にしやすい。短期に目標を設定できるため、モチベーションを高く保ちやすいという利点があると思う。

6、校内以外での自分の位置を知る。

生徒たちが本番の試験で戦うのは、全国の受験者である。全国で自分の位置を知ること、本番の試験での合格見込みが立てやすいと思う。  
以上六点に分けて私が思う「模擬試験を受ける意義」を述べてきた。生徒たちが将来の夢の実現のために少しでも参考になれば幸いである。

### 野球クラブの活動

顧問 望月一志・斉藤隆一

今年も11名と多くの四年生が野球クラブに入ってきました。五年生8名、六年生8名の総勢27名が火・木曜日に野球場やグラウンドで大きな声を出して活動しています。特に四年生は、初めてのクラブ活動ということもあり、「今日は何をやりますか?」「バツティング練習はしますか?」など、クラブが行われる日は、朝から楽しみにしている姿が見られます。

練習では、六年生を中心にボールを『捕る』『投げる』『打つ』という基本的な練習を行っています。グローブの使い方や投げ方などをキャッチボールをする中で、五・六年生が四年生の所に行き直接声をかけたり、教えたりする姿もよく見られました。バツティング練習では、バツティングマシンを使って『打つ』タイミングや感覚を覚え、楽しみながら行っています。2学期に入ってからには、2チームに分かれて試合を行っています。子ども達は、勝ち負けもありますが、実践的に練習することでルールや動きなど、試合でしか経験できないことも覚えることができ、いい経験になっています。毎週練習を重ねていくうちに、少しずつ『捕る』『投げる』『打つ』ことが上手になってきました。また、技術的なことだけでなく、放課後クラブの中で異学年との交流も良い刺激になっています。野球を通して、色々な事を経験してほしいと思います。



### たてわりでするサッカー

顧問 奥石純一・長澤宏治

現在サッカークラブに所属している児童数は、39名。普段の練習では20〜25人ほど集まって練習しています。まず、チームは3つに分かれています。そのチーム内で、子どもたちが練習メニューを組み立てて20分程度の練習をし、その後チーム同士の試合をしています。これが基本的な練習内容です。

一つのチームの中に、学年のちがう友だちがいます。知らなかった友だちもいます。もちろんサッカー経験の差もあります。そのような仲間を、今の六年生がリーダーになって、どうまとめるのか期待と不安がありました。

予想通りだったのは、先頭に立って引張る子とそうでない子に分かれたことです。普段、同じ学年の友達と遊ぶことが多いということもあるのか、全体をまとめようという意識が弱かった。逆に、上手くリードをして練習に取り組んでいるチームも見られました。

その反対に、予想外だったことがあります。私が一番予想外だったのは、六年生になつてから、試合の中で独りよがりのプレーが少なくなった子がいたことです。味方とうまくパス交換をして攻撃していました。これには、長澤先生と一緒に驚いてしまいました。なぜ驚いたかという点、五年生までの彼を見てみると、個人プレーばかりに頼ってしまう選手だったからです。視野が広がったのか、周りの味方を生かしてゴールを目指そうとしていました。

十一月二十二日には、今年度初の対外試合を予定しております。思い切りサッカーを楽しみつつ、仲間といい思い出が作れたらいいなと思っております。

### 思いやりのスポーツ

顧問 中楯 美紗・佐久間 恭子

「お願いします」、「ありがとうごさいました」の挨拶とともに、礼儀正しく、体育館に出入りする子どもたち。元氣よく体育館にやってきて、思いっきりバレーボールに親しんでいます。ボールを立て、ネットを張る準備から、後片付け、モップがけまでしっかりとこなしています。ランニングや走り込み、パス練習といった基礎練習、サーブを入れ、ラリーが続くように、気持ちをつなげる試合にも一生懸命に取り組んでいます。

段々と上達が見られる四年生、確実に力をつけてきている五年生、クラブ長、副クラブ長を中心に、安定してクラブを引っ張っている六年生が一丸となり、活動しています。パス練習でも、先輩と後輩と一緒に組み、教えてもらう先輩に「お願いします」の挨拶を丁寧にするなど、先輩は、後輩に優しく教えてあげることが大事にしています。

バレーボールは、思いやりのスポーツだといやりの言葉を合言葉に、試合中は、お互い声をかけ合うことも重視しています。チーム全員で協力し、助け合う心も学んでほしいと思っています。

小学校から練習を積み重ね、進化した後も、駿台伝統のバレーボールを続けていくと願っています。楽しそうにスポーツをする子どもたちの笑顔を大切に、同時に技術も磨いていけるよう、今後もサポートしていきます。



### 音楽を楽しむ

顧問 花輪 悠貴

「チャレンジ!スマイル!」今年の吹奏楽クラブは、この言葉を合言葉に、「第二八回山梨県小学校バンドフェスティバル」に初参加しました。山梨県内小学校のブラスバンドが一堂に会し、日ごろの練習の成果を発表しました。

金管や木管楽器は「音」が出るまでに時間を要し、さらに大勢の前で演奏できるような「きれいな音」ともなると、たくさんの努力が必要になります。子どもたちは、日ごろの練習や努力をコツコツと積み重ねてきた成果として、ステージに立ちました。

今年、パフォーマンスにチャレンジということで、『宝島』では、呼びかけと手拍子を行いました。本番では、音楽を通して、演奏と会場が一つになる素晴らしさを体験しました。何より、子どもたちが真剣に音楽を楽しもうと努力しているのが分かる、大成功のフェスティバルになりました。

子どもたちには、県内の他の小学校のバンドを見たこと、演奏を聴いたこと、また、自分たちが仲間と立派なホールで演奏したこと、様々なことを通じて自分なりに何かを感じ取ってほしいと思います。そして、そこから生まれた音楽の感動をぜひ生涯覚えていてもらいたいものです。終わりにになりましたが子どもたちを励ましたくださった保護者の皆様、心から感謝申し上げます。



### 高校よい

#### 新人戦優勝(3年連続19回目)

男子ハンドボール部 顧問 山下 敏伸  
 新チームがスタートして初めての公式戦となりました。

初戦(二回戦) 甲府工業は、硬さの目立つ立ち上がりで、重苦しいスタートとなりました。終わってみれば42-18というスコアだったので、相手のきれいなボール回しが印象的な屈辱の船出となりました。

ところが準決勝の山梨高校では打って変わったきらめきを随所に見せ、49-24で快勝しました。決勝は都留高校が相手でしたが、今度は工業戦のような弱弱しい印象で、一日の中で、全く違ったチームを見たようでした。結果は日々の練習の成果が出、43-24で終わりましたが、ここの一番で決め切れない弱さも散見され、まだまだやるべきことは多いという感想を持ちました。

けれども、これこそが新チーム。これから濃密な練習を重ね、過去の先輩に追いつけ追い越せで精進を期待したいと思います。年末には関東選抜大会への出場権をかけて、新人大会上位4チームでリーグ戦を行います。常に平常心で試合に臨めるよう、日々から負荷をかけていきます。引き続き、応援よろしくお願いたします。

#### 4年連続6回目の優勝

女子ハンドボール部 顧問 益田 耕治

10月18日・19日・25日に県新人大会が行われました。初戦は甲府一高と対戦し39対5で勝利し、準決勝、韮崎高校との対戦は28対8で勝利し、決勝戦では日川高校

を34対16で下し4年連続6回目の優勝を勝ち取ることができました。しかしながらここ数年、全国選抜大会に出場ができていないのが現状です。春の全国選抜大会出場を目指し、普段の生活と日々の練習を良い緊張感を持ちながら大切にしていきたいと思えます。今後ともご声援の程よろしくお願申し上げます。

#### 山梨はあきらめない

陸上競技部 顧問 三枝 幸雄

今年9月の県高校新人で、女子は久しぶりの総合優勝、男子は総合準優勝という結果でした。少人数のエントリーですから総合優勝することは至難の業です。ほぼ短距離種目だけの成績ですから、関東に向けてモチベーションは高まりました。10月のその関東選抜新人(茨城)では男子の走幅跳で奈良が入賞、4継(辰巳、奈良、渡辺、大久保)でも入賞、女子も400mで山田が準優勝、1000mで小林が入賞しました。11月、本年度最後の全国レベルの大会エコパトラックゲームズ(静岡)では女子マイルリレー(小松、小林、白倉、山田)で県新記録を樹立しました。怪我人が復帰してきて戦力は整いつつあり、3月まで鍛錬期として陸上競技部は活動します。関東のレベルはそのまま全国で決勝を狙えるレベルです。その域に達するまでこの冬、覚悟を決めて活動します。駿台甲府高校はあきらめません。駿台が頑張ることがそのまま山梨の力として評価されるのです。真剣に全国制覇目指していきます。今後とも指導をよろしくお願いたします。

#### 三年ぶりの新人戦優勝

男子硬式テニス部 顧問 筒井 揚介

去る10月18日(土)・19(日)、小瀬スポーツ公園テニス場において新人大会が行われ、男子団体は第一シードの甲府工業を3-0で破り三年ぶりに優勝旗を持ち帰ることができました。シングルス2本が安定していたためダブルスで勝負することができ、キャプテンの采配も光りました。12月24日(水)から千葉・白子でおこなわれる関東地区大会に出場します。テニス部初めの全国選抜大会出場を目指してがんばりますので、応援よろしくお願いたします。



#### 高校サッカー選手権

サッカー部 顧問 長谷川 亮太

9月25日から11月8日までに第93回全国高校サッカー選手権大会山梨県大会が行われました。我々駿台甲府高校サッカー部もスポーツクラス1期生が3年生となり、初



めて他校と同じ条件で戦えるようになりました。2回戦は富士北稜高校に7-1で快勝しましたが、終盤足が止まって、失点してしまふような甘さがありました。3回戦は韮崎高校を破った甲府工業相手に前半先制されるも後半残り2分で追いつき、延長で逆転しました。塩部ダービーを2-1で制し、ベスト8に進出することができました。夢の舞台まであと一歩というところで迎り着きましたが、準々決勝で日本航空に0-3で敗れました。まだまだ4つの壁を乗り越えるには力不足でした。大舞台の経験も足りなければ、サッカーに駆ける思いでも大きな差を感じました。しかしながら、多くの方が会場まで足を運んでくださり、大きな声援が選手たちの力になりました。ありがとうございました。

ありがとうございました。

馴れ合いとなつてしまったサッカー部を、もう一度戦える選手を育て、規律あるサッカー部目指して指導していきたいと思っております。新チームとなり未熟な点が多いですが、様々な場面で、これからもご指導・ご支援・ご声援をよろしくお願致します。

芸文祭で最高賞受賞

書道同好会 顧問 影山 正美

今年の山梨県芸術文化祭には、二年生の四名が出品しました(各校四点まで)。大橋日向子(二年B組)さんが、最高賞の芸術文化祭賞をいただきました。来年の全国総文祭(滋賀大会)へ参加することが決定しました(作品は写真の最右です)。



五年ぶりの優秀賞

合唱部 部長 2D 猪股 佑美

私たち合唱部は芸術文化祭で「くちなし」と「カントリー・ロード」を合唱し、五年ぶりの優秀賞をいただきました。2つの曲は雰囲気全く異なっていて、歌いわけがとても大変でした。部員全員が練習に揃うことも少なく、合わせの練習が困難でした。土曜の午後などを使ったりし、最後の一週間は非常に集中して練習をしあげました。直前で形にして当日を迎えたようになりましたが、本番では普段の練習の時よりも部員全員がほどよい緊張感で集中し、よい表情でしっかりとみなさんに歌声を届けられたと思います。発表し終えたあとも、部

員はみんな「少しの失敗はあったものの、やりきった」という表情をしていました。審査員の講評も、今までにない良い評価でもとても嬉しかったです。

そして今回の発表は次の大会に向けての課題を私たちに気づかせてくれました。少ない練習で優秀賞が取れたことはわたしたち一人一人の自信になりました。長期的に内容の濃い活動をする、実力もさらに見違えるほど変わると思っています。

次の大会に向けて全力で練習をして行こうと思うようになりました。そしてまた、次の大会でも新たな課題を見つけ、さらに向上していこうと思います。

是非、みなさんの応援をお願いします。

女子個人戦優勝

将棋部 顧問 嶋津 由希

去る11月4日(土)、山梨高等学校において山梨県高等学校芸術文化祭将棋部門大会が行われました。今回は個人戦のみで、本校からは男女合わせて8名の生徒が大会に出場しました。1年生の中には大会に初めて出場する生徒もいて緊張感のあるスタートとなりましたが、試合が進むにつれ徐々に雰囲気にも慣れ、それぞれの生徒は持てる力を発揮したのではないかと感じています。

1年生の天明屋黎が女子の部で優勝し芸術文化祭賞を受賞し、関東大会、全国大会の出場権を獲得しました。また予選リーグを勝ち上がって代表決定戦に進出したり、大会初参加で初勝利をあげる生徒もいて、今後につながる結果を残すことができました。

美術・工芸

美術デザイン科 渡邊 成美

山梨県高等学校芸術文化祭が11月16日に行われました。

今回は美術デザイン科で1年生1名、2年生3名の合計4名が美術・工芸部門に出品し、受賞をめざし制作に励んでいました。残念ながら受賞をすることが出来ませんでしたが、全体的に見ても引けを取らず、堂々と美術館に飾られました。

各校の先生方や来場者にも好評だったので、悔しい思いをしていた生徒たちも、今回の気持ちバネに前向きに制作していきたいと話しています。

受賞はできなかったけれども、ちゃんと評価してくれる人がいることや、見てくれる人がいることに嬉しさを感じていたので、いい経験になったと感じますし、今後より良い作品を作ってくれようと思います。

ポスター部門の方では、2年の芦澤美佳が優秀賞、3年の新海帆南が奨励賞を受賞し、山梨県高等学校美術部連盟展に飾られています。



(右記写真 2年 芦澤美佳作品)

35周年記念 「すんたくん」

指導監 石川 博

今年は、駿台甲府高校の開校35周年にあたる。11月1日に、同窓会主催の記念行事が行われ、記念誌も発行された。当日は、同窓生の経営する飲食店が多数出店し、多くの参加者の笑顔が見られた。顕著な活躍をした卒業生に贈られるチャレンジング・スピリット賞に輝いたのは、ロンドンオリンピック陸上女子リレーに出場した22期の佐野夢加さん(現姓三井さん、駿台甲府小教員)と、B級グルメでグランプリを獲得し、甲府鳥モツ煮を全国に広めた10期の土橋克己さん(甲府市役所勤務)。夕刻からは体育館の特設リングで本物のプロレスが行われ、男子校の頃の同窓生は、当時の学園祭を思い出していた。



同窓会から学園に、マスコット「すんたくん」の着ぐるみが寄贈された。今後、各種行事で活用していきたい。同時に駿台甲府の女子制服を着たキティちゃんストラップが、高校生全員に贈られた。改めて、同窓会の皆さんにお礼申し上げる。また、当日、中学・高校の吹奏楽部、ハンドボール部の諸君が盛り上げてくれたことにも感謝する。

## ベンチャー企業から学ぶこと

## 3年副担任 原 大介

「ユグレナ」をご存じでしょうか。現在、テレビや雑誌などの特集などにより話題であり、またスーパー等の食品コーナーで見たとある人も多いのではないのでしょうか。ユグレナとはミドリムシの学名である。ミドリムシといっても虫ではなく、微細藻類の一種であり、約5億年前から地球上に存在している生物である。

駿中3年生は、秋の研修で企業見学を行った。見学先は、海洋研究開発機構と東京ガス根岸工場と並んで、ユグレナ社の中央研究所へ行った。ユグレナ社とは、ユグレナの研究および商品開発(主に食品)を行い、急成長を果たしているベンチャー企業である。この度の企業見学においてこのベンチャー企業を見学先の一つに加えたのは、生徒にこの企業から何かを学んで欲しかったからである。

ユグレナ社については先日、「カンブリア宮殿」というテレビ番組で特集が組まれていたので、ご存じの方も多と思うが、ユグレナ社は設立十年にも満たなく、社員数もそれほど多くない小さな会社である。しかし現在幅広い活躍により、東証に上場するほどにより資本金が40数億円となる等の成



果を上げている企業である。私はこの会社の存在を数年前から東京大学発のベンチャー企業としてその存在を知ってはいたが、その頃はここまで拡大するとは思ってはいないことであつた。

傍から見ていると順調に成長しているようにみえるが、その過程は大変苦労したようである。先ずはミドリムシの培養するための研究は困難であり、現在に至るまで試行錯誤の繰り返しであつたようだ。また、ミドリムシという虫を連想させるイメージの名前のため、サプリメントなどの商品・食糧を開発しても、どの企業も取り扱ってくれず、プレゼンをして数百社に断られたそうだ。しかし、それでも情熱は衰えず、商品開発を継続したのは、感服の至りである。そこには、社長を始めとする起業家たちの学生時代からミドリムシを開発し、社会に役立てたいという強い思いからである。我々の企業見学の際にも、その思いが伝わってきました。「ユグレナを使い、世界の食料難を解決したい。」その信念があるから、困難に直面しても立ち向かえるのでしよう。

人と違うことを考え、そして実行することは必ず困難を伴う。しかし、強い思いがあれば必ず困難に立ち向かい、打ち勝つことができる。そのような挑戦することの大切さを生徒に学んで欲しいと思い、ユグレナ社にお願いして特別に見学させてもらいました。

今回の見学を通して、生徒が将来自分の信念を持ち挑戦することの大切さ、つまりチャレンジングスピリットを持ち続け、困難にあつても乗り越えていく勇気持てるような人になるきっかけとなることを願っています。

## 秋の研修と駿台のルーツを探る旅

## 2年A組担任 中村 圭世

去る10月23日に2年生は駿台グループの発祥の地である東京お茶の水に行つてまいりました。今回の研修では、駿台予備学校お茶の水校2号館を訪問した後、グループごとに事前に立てた計画に従つて、明治大学博物館、古書店街、昭和館、しょうけい館、科学技術館、靖国神社などを見学して回りました。

この研修の目的は、広島・京都への修学旅行における班別自主見学の予行演習として、仲間と協力しながら、旅行の計画の立て方、地図の読み方、集団行動のルールなどを学ぶことにありました。そして、もう一つの大きな目的は駿台グループに属する駿台甲府中学校で学ぶ者として、そのルーツを知ることになりました。

駿台予備学校には様々な面でお世話になっていきます。大学の受験情報のほとんどは駿台予備学校からいただいていますし、授業の補助教材で予備学校のテキストを使用しています。また、多くの生徒が早朝や放課後に駿台サテネット(衛星放送)の講座を受講していますし、夏期講習などで東京の駿台予備学校に通う生徒もたくさんいます。ですから、駿台生にとつて、駿台予備学校はとても身近な存在です。しかし、中学2年生では、大学受験はまだ先で、予備学校はあまり身近な存在ではありません。ですから、東京の予備学校に連れて行つてもあまりピンとこないのではないかと思います。事前に駿台グループの歴史をまとめたDVDを学年全体で鑑賞し、創立者である山崎寿春先生がどのような理念をもつて駿台予備学校を初めて

する駿台グループを設立したのかをあらかじめ学んだうえで訪問しました。

駿台予備学校に到着しますと、大勢の職員の方が生徒たちを温かく出迎えてくださいました。校舎内の施設を見学させていたただいた後、校長の藤本さんよりお話を伺うことができました。



駿台グループがおよそ百年前に山崎寿春先生によつて「愛情教育」という理念のもと、小さな講習会からスタートしたところや、現在では日本国内にとどまらず海外にも校舎を開設し、世界に駿台のネットワークができていくというお話を聞き、生徒達は駿台のルーツについての理解をより一層深めることができました。

「駿台」の名は、その発祥の地、「神田駿河台」の地名だけではなく、実は「駿」＝「優れた人」も表しているそうです。自分の夢を追い、たゆまぬ努力をする前途ある優れた若者を、愛情もつて応援したいという創立者の思いが込められているということです。

今回の研修を通して、駿中生が、「駿台グループ」というサポート体制の中、いかに恵まれた環境の中で、学業に専念することができているのかということを感じたのではないのでしょうか。この研修で学んだことを、今後の学校生活に生かし、学業をはじめ、様々なことに積極的にチャレンジしていつてほしいと思います。

### 横浜へ行くことの意義

#### 1年C組担任 牧 和弘

中学1年生は秋の研修旅行において横浜へ行きました。この研修旅行では3つの大きな目的がありました。

① 開港約150年を迎えた横浜の地を訪れることは、近代日本の出発点を確認し、日本の歴史を振り返る絶好の機会となること。

② 数多くある文化遺産・資料館の中から興味あるものを自ら選び、主体的に見学する態度を身に付け、自己研鑽に努める態度を養うこと。

③ 中学生にふさわしい集団的・自主的な行動規範を学び、集団行動のロールの大切さを学ぶとともに、仲間との交流を図る手助けとなること。

横浜港は砂嘴(さし)です。

砂嘴とは陸地から細長い砂州(さす)がくちばしのように突き出た地形であり、港としては最適な場所です。どこの沿岸にも沿岸流という海の流れがあり、その沿岸流が長い時間をかけて土砂を運び、場所によっては土砂が海底から積み上がり、ついには、海面の上にも現れます。

横浜が歴史の表舞台に登場するのは、

一八五九年です。それまでは、砂嘴の上にわずかな家が立ち並ぶだけの漁村でしたが、アメリカとの間に結ばれた日米修



好通商条約で横浜が開港することになり、多くの外国人がやって来ました。慶応大学を創設した福沢諭吉も開港後、すぐに

横浜見物に行ったそうです。『福翁自伝』では、横浜に突如出現した英語の看板や瓶のラベルを自分が一切読むことが出来ないことに落胆し、英語の勉強に励む覚悟を抱いています。

すぐれた紀行文の作者である英国女性イサベラ・バードは一八七八年に横浜港に入り、彼女の『日本奥地紀行』のなかで、横浜のことを触れています。彼女は日本人の背の低さと顔つきの貧相さに驚くとともに、町の様子について「街路は狭いが、しっかりと舗装されており、よくできている歩道には縁石、溝がついている。ガス灯と外国商店がずらっと立ち並び大通りを過ぎて」と記述しています。現在、横浜の代表的な道である馬車道では、鑄物のガス灯風の街灯、赤レンガ風の歩道、19世紀の雰囲気を感じ出す公衆電話ボックスなどが設置され、横浜の街を再改造しています。横浜という街は一つの大きな映画セットのようであり、気取って芝居の一つでもしてみようかという気になります。

横浜は近代日本とともにその歩みを始め、多くの歴史が刻みこまれた街であり、その中には教科書で目にしたものもたくさんあります。横浜での研修旅行は近代日本の歴史に触れるよい機会であったと思います。また、生徒が生きる時代は世界の常識が日本の常識となる時代です。このような時代を迎えて、生徒は自分だけのような能力が必要なのか考える良い機会になったのではないのでしょうか。今回の経験を活かし、これまで以上に生徒が学校生活を充実したものにすることを期待しています。

### 県新人大会報告

#### 2学年副担任 山口 倫明

2年生を中心とする新チームとして初めて挑んだ甲府市新人大会では、思うような結果を残すことができなかった部活動が多かった印象です。そんな中で、いくつかの部活動が県新人大会に出場しました。主な結果は以下の通りです。

#### ●ハンドボール部(男子) 第5位

○予選リーグ

対 笛川	26   7
対 松里	19   20
対 山梨北	14   17

予選リーグ3位で決勝トーナメントへ

○決勝トーナメント

1 回戦 対 山梨南	21   26
5 位決定戦 対 城南	27   18

#### ●ハンドボール部(女子)

○予選リーグ

対 塩山	12   20
対 山梨北	5   34

#### ●バレーボール部(男子)

1 回戦 対 山梨南	0   2
------------	-------

#### ●卓球部(男子)

○団体戦	
1 回戦 対 田富	0   3

○個人戦 出場者3名 初戦敗退

#### ●卓球部(女子)

○団体戦	
2 回戦 対 山梨北	0   3

○個人戦 出場者4名

4 回戦進出(ベスト32)	2 名
---------------	-----

#### ●硬式テニス部(男子)

○団体戦 第3位	
2 回戦 対 白根御勅使	3   2

準決勝 対 甲府東 2 | 3

○個人戦

シングルス	ベスト16入り 2 名
ダブルス	第3位 跡部瑛都(2年)

小田切勇人(2年)	ベスト8入り 1 組
-----------	------------

#### ●硬式テニス部(女子)

○団体戦 第3位

1 回戦 対 長坂	5   0
2 回戦 対 甲府東	3   2
準決勝 対 高根	0   3

○個人戦

シングルス	第3位 丸山亜瑞(1年)
ダブルス	ベスト16入り 2 名

#### ●陸上競技部

各種目での決勝進出者 0 名

#### ●サッカー部

1 回戦 対 敷島	0   4
-----------	-------

思うような結果が残せなかった要因の一つに「普段力」があると感じました。

音楽室の壁に『練習は本番のように、本番は練習のように』と掲示されています。

これは、「普段力」の大切さを伝えている言葉だと私は考えています。部活動の取り組む際の意識の置き方を考えさせられます。

生徒たちにはもう一度、「文武共存」「普段力」・「やるときはやる駿中生」を思い返してもらいたいと思います。そして、新年度

になって行われる大会では3年生の結果を越えなくても、匹敵するくらいの成果を出

してくれることを期待しています。

### 合唱クラブデビュー!

合唱クラブ担当 依田 秀樹

駿小合唱クラブは今年の四月に創部しました。記念すべき最初の部員は、四年生14名・五年生7名・六年生5名の計26名。とにかく歌うのが大好きな子どもたちで、外部指導者で童謡歌手の若林秀和先生の指導のもと、楽しく練習に取り組んでいます。

創部したばかりの合唱クラブですが、八月六日に、「第八十一回NHK全国学校音楽コンクール山梨県大会」にフリー参加で出場しました。創部当初からこの大会に向けて、子どもたちは一生懸命練習しました。初めての人前での演奏が「Nコン」という大きな舞台で、しっかりと歌えるか心配でしたが、さすがは駿小生。本番では今までの練習の中で一番良い演奏することができました。

Nコンでは審査をしている間、毎年特別ステージを行います。そのステージの最後では、出場校全員でビリーブを歌いました。歌い終わった後には、

子どもたちがそれぞれ握手をし、音楽を通じて新たな仲間ができた瞬間でした。

来年の二月八日には、桃源文化会館にて、吹奏楽クラブと合同の「第一回駿小音楽祭」を行います。自分たちが主役の演奏会。次はどんな演奏を聴かせるのか、今から楽しみです。



### 朝の読書と読書週間

司書 辻 直子

担当予定の図書委員が欠席で、急ぎよ行うことになった五年一組での読書聞かせ。天童荒太さんの『どーしたどーした』を読みました。シーンと静まり返った教室。子ども達がお話にのめり込んでいたと感じられた時のなんとも言えない興奮と気持ちよさ。これこそ、読書聞かせの醍醐味です。

現在、朝の読書は、一・二年生が担任・副担任による読書聞かせ、三年生から六年生までは一人読みを行っています。そして去年から「駿小読書聞かせ隊」として、図書委員が一ヶ月に一回、三年生から六年生までの各クラスに本や大型絵本、紙芝居などを読みに行っています。

読書聞かせのあとに、子ども達がその本を借りてくれた時のあの嬉しさ。五年一組でも、たくさんのお話を借りてくれ、図書室に入る時に「どーした!」と言う児童もいて、とても微笑ましかったです。

十一月四日(月)から十四日(金)の二週間は読書週間で、十日(月)には読書集会を行いました。今年の読書集会と言えば、劇仕立ての図書委員による本の紹介と劇『エルマーのぼうけん』です。図書委員による本の紹介は毎年行っていますが、今年は昔話「三枚のお札」のお話の中で本を紹介するという新しい方法で行い、面白かったという意見をたくさん頂きました。劇においても、朗読劇ではなく劇をしてほしいという子ども達の声に押され、時間がない中で必死に練習を重ねたことで、本番素晴らしいものを作り上げることができました。今年の課題を改善し、来年ももっと充実した読書週間にしていきたいです。

### ハロウィンパーティー

一学年主任 小西 静穂

ハロウィンパーティーは、子どもたちの楽しみにしている行事の一つです。

イメージ的には、カボチャのお化けを想像しがちですが、毎年一年生がジャック・オー・ランタンを先生たちと一緒につくりまわす。今年も、六つのジャック・オー・ランタンが出来上がり、下校の時に児童玄関に飾りました。つくった一年生は、お迎えに来たお家の人たちに、どのカボチャをつくったのかを話しながら、楽しそうに一緒に見せていました。



「トリック・オア・トリート(お菓子をくれなきゃ、いたずらしちゃうぞ。いたずらかお菓子か、どっちにする?)」は、子どもたちがお菓子をもらいにいくという文化もあります。外を徘徊している霊たちが家の中に入ってしまったように、お菓子を渡すことで元の世界に戻ってもらうためだそうです。もちろん一年生のゲームの最後は、「トリック・オア・トリート」と言って、お菓子のかわりにシールをもらいました。各学年で、ハロウィンにちなんだゲームをします。「アイボール(目玉)リレー」・「スケルトン(骸骨人形)フィッシング」・「ピンザノーズ(福笑い)」など、楽しいゲーム

がたくさんあります。

思い思いの仮装をして、ハロウィンパーティーを行うのは、高学年です。日本でも年々仮装をして町へ繰り出す人々が増えてきたようで、ニュースになっていました。が、小学校でもネイティブの先生方の仮装や学年の先生方の仮装も楽しみな一つです。特に六年生は、小学校最後のハロウィンパーティーでしたので、それぞれに仮装を考え参



加しました。

楽しく英語を学ぶ子どもたちは、ネイティブの先生と話すのも戸惑いはありません。これからも、この楽しさを忘れずに、英語を学んでいってほしいと思います。

### 駿小 収穫祭!

二学年主任 有野 眞紀子

秋深まりゆく十一月三十一日(金)に今年も駿小収穫祭が行われました。毎年、中心となってお祭りを盛り上げているのは二年生!準備から当日の進行まで張り切って頑張りました。



「収穫祭」は、形こそ異なれ世界中で行われている年中行事です。農作物の収穫に感謝し、来年の豊作を祈念する祭りです。駿小にも、「つくし村」という学校農園があります。各学年が様々な野菜を育て、収穫しています。今年も豊作でした。一年生が「トウモロコシ」「お米」、六年生と一緒に育てる「ジャガイモ」「大根」、一年生が「お米」「サツマイモ」「落花生」、三年生が「玉ねぎ」「里芋」「ニンジン」、四年生が「ナス」「ピーマン」「ほうれん草」、五年生が「インゲン」「大豆」「京菜」、六年生が「ミニトマト」「小松菜」「チンゲン菜」。それぞれ育て収穫しました。普段何気なく食べている野菜も、自分たちで育て収穫することで、大切に思い感謝する気持ちが生まれ、成長を観察しながら四季を感じる心が豊かになったりしていきます。

「ドンドコドン、ドンドコドン!」力強い二年生の太鼓の音で収穫祭が始まりました。秋を歌う合唱に続き、お祭りのメインイベント「お神輿」の登場です。「ワッショイ!ワッショイ!」今年のお神輿は、貼り絵の世界遺産の富士山、紙粘土で作ったたくさんの収穫物やたわわな果物、そして先生たちが作った鳳凰!立派なお神輿です。全校の児童が一緒になって「ワッショイ!ワッショイ!」と掛け声をかけ盛り上げてくれました。



開祭式の後には、いよいよ楽しみにしていた「お店」です。各クラスが趣向を凝らしたゲーム等のお店が並びました。一年生は「つり屋さん」、二年生は「的あて」、三年生は「宝さがし」、四年生は「なぞとき・ゲーム」、五年生は「迷路」、六年生は「時代劇」!先生方による「ポップコーン屋さん」も出店。出来立ての美味しいポップコーンも大好評でした。給食には、つくし村で収穫した野菜が入った豚汁も戴きました。お店の準備から当日まで、駿小児童にとっては、本当に楽しみな行事です。また来年もつくし村が豊作であることを願いながら、閉祭式で終わった「収穫祭」でした。

### PTA文化講演会

文化部担当 長澤 宏治

小学校では、十月と十一月の二回に分けて、PTAの文化講演会を実施しました。講演会というと、じつと静かに聞くイメージがあるかと思いますが、小学校では、楽しいことも大切に考えた講演を行いました。第一回目は、ギネス記録を持つシャボン玉アーティストである杉山兄弟を招きました。お二人は、小さいころからシャボン玉遊びをしていて、様々なシャボン玉を作るうちに、その魅力にとりつかれ、シャボン玉を研究するようになっていたそうです。



講演会では、様々な形、大きさのシャボン玉を作り、その度に子どもたちから歓声が沸いていました。今回使用されたシャボン玉液は食べても無害なもので、それを聞くと、率先して食べようとしている姿が微笑ましかったです。また、子ども自身がシャボン玉を作ったり、シャボン玉の中に入ったりするコーナーもあり、子どもたちは、目を輝かせて体験をしていました。子どもたちにとつて、身近な遊びのものが、工夫を重ねることで、普段とは違うものとなることが驚きだったようで、講演後、自分でシャボン玉液を作り、様々な道具でシャボン玉遊びをした児童も多くいたようです。第二回目は、標高世界第二位のカラコルム山脈のK2(8611メートル)に日本

人で初めて無酸素単独登頂に成功した、戸高雅史さんを招きました。

普段は見ることでできない、高所の景色や体験談を、写真や音楽を交えながら、伝えてくださりました。なかなか見ることはない景色に、子どもたちはよめき、雄大な自然に触れることができました。また、戸高さんが、過酷な環境に身を置いていた体験から感じた、「生き抜くには進むしかない」!今を大切にする!



という言葉が印象に残った児童が多かったようです。それは、単に、高所のきれいさや大変さだけでなく、命というものの尊さを学ぶことができたということだと考えられます。今回の講演者の方々に共通しているのは、今の生き方を楽しんでいることです。人それぞれ、楽しさの感じ方は異なると思いますが、自分にとつて楽しい生き方を見つけることの大切さを、伝えてくれたように感じます。そんな方々から、子どもたちへメッセージを送ってもらうことで、何か一つでも心に響いてくれるものがあれば、今回の文化講演会は成功だと言えらると思います。これからも、様々な世界の中で生きていく方々の生の声を聴く機会を作り、子どもたちに多くの刺激を受けてもらいたいと思います。